3章

【問題】（演習／共通問題）

出典…多木浩二『生きられた家』／お茶の水女子大学・97年

文章略解

西洋の建築とは、内的世界と外的世界とを二元論的に対立させることから「空間」概念を象徴するものである。これに対し、日本人は内的世界と外的世界との曖昧な境界を本質と捉えているため、日本の家には実体的な強さはなく、室内の物がその時々の室内の人との関係性によって意味を変える。また、室内の物の配置も必要に応じて変えられる。言うなれば日本人は、室内の物をも、相互の関係性を築く主体として捉えているのである。

解答

問1　室内空間が道具との一意的な結びつきを持たず、その時々の関係性に応じて道具の意味や配置が変化すること。〔50字〕

問2　西洋建築では、天井を物質で区切って輪郭を明確にすることによって、建築の実体を表象するということ。〔48字〕

問3　日本人は、建物において主観と客観が二元論的に対立するとは考えず、両者の境界はその時々の関係の変化に応じて動きうる曖昧なものとして捉えているということ。〔75字〕

問4　前者では室内の道具の配置が必要に応じて変化するのに対し、後者では室内空間に道具が固定されている。〔48字〕

問5　日本人は、物とは必要な時に一時的に室内空間の中に現れて、その場にいる人間との関係を築き、やがて姿を消すという主体的な存在として捉えているということ。〔74字・解答例〕

【問題】（自習／共通問題）

出典…佐藤学『学びの身体技法』／大阪大学・99年

文章略解

「学力」とは、現在では教育的な概念というよりはむしろ、市場経済における貨幣のようなものとして機能している。それは多様な経験を一つの尺度で価値づける〈評価基準〉であり、労働力市場や受験の市場においては〈交換手段〉であり、将来の目的に備えての〈貯蔵手段〉であり、幻想によって人の欲望を媒介する〈想像的表象〉である。紙片それ自体には意味や価値はないが、記された数値に価値を与えているのは人々の幻想なのである。

解答

問1　(1)＝しゃしょう　(2)＝たくわ（える）　(3)＝じゅばく　(4)＝じょうせい　(5)＝しいてき

問2　一人ひとりの個別具体的な学びの経験〔17字〕（11行目）

問3　数値を記した一枚の紙切れには何の意味や価値もないにもかかわらず、人々の幻想によってそこに記された学力の数値が他のすべてに優る価値を持つものとみなされ、人々の欲望や人間関係の媒介になったということ。〔98字・解答例〕

解説

問2　抜き書きの問題に際しては、設問の指示を吟味して「形式面での条件」を抽出し、同時に設問箇所を文脈的に検討することで、解答箇所が備えるべき「内容面での条件」を抽出していくことだ。どれだけ具体的な条件が抽出できたかによって、解答の見出しやすさが決まってくる。言い方を換えれば、問題文を探し始める前にすでに勝負は決まっているのだ。

形式面での条件については「二十字以内の語句」とあるだけである。二十字に近く、しかも「語句」としてまとまりを持った部

分、ということになろう。また、傍線部分が「一回性」という名詞で終わっていることから推せば、この解答も名詞句である可能性が高い。

内容面については、傍線部分の前後で「この『学力』の観念が……と鋭く対立している」（27行目）とあるところから、この問題文中で筆者が述べているところの「学力」という概念と反対の性質を持っているものだということがわかる。

では筆者の言う「学力」の概念とは何か。第一段落では「市場経済の概念」（5行目）であるとされ、続く三つの段落で〈評価基準〉＝「独自の性質を捨象して一つの尺度で価値づける」（8行目）・〈交換手段〉＝「入試や雇用」における「合理的な交換を実現することができる」手段（13～19行目）・〈貯蔵手段〉＝「計画性と合理性を要請する」「時間的な連続性と持続性をもたら」すもの（20～23行目）という三つの性質が具体的に述べられている。これらを総合すれば「学力」とは「時間的・空間的な普遍性」を本旨とするものであろう。

これと対立する「教育経験の一回性」に相当する語句を抽出するなら、ここまでの段落で「貨幣」「学力」と対比されてきたものを探していけばよい。第二段落に「一人ひとりの個別具体的な学びの経験」（11行目）という表現があり、これならば「教育」に相当する語も「経験」に相当する語も「一回性」に相当する語も含んでいる。なおかつ「普遍性」と相対する性質の語も含まれているわけで、出題者の想定した解はここであろう。

問3　傍線部分に続く二つの段落で具体的に述べられているところをまとめていけばよい。「学力」と「貨幣」に共通する性質として、この部分で筆者は「それ自体はなんの価値ももたない一枚の紙切れや一個のコイン」（34行目）・「それ自体としてはなんの意味もない一枚の紙切れの……数値」（39～40行目）を指摘している。つまり、「学力」にも「貨幣」にも、それ自体にはモノとしての価値があるわけではない、ということだ。考えてみればすぐにわかることだが、一万円札を構成している紙自体に一万円の値打ちがあるわけではない（古紙回収に出してみればよい）。それに一万円の価値があるというのは、「円」が通用する経済圏でのみんなの約束事によるものである。そのことを筆者は「〈想像的表象〉の産物」だと言っているわけだ。こうした性質を、この傍線部分の主語である「学力」（カギカッコつき）に即して具体的に述べれば、ここでの作業課題をクリアしたことになろう。

まず指摘すべきは、紙に記された「学力」の数値自体にはなんの価値もないということ、にもかかわらず社会の人々がそれに対して実際以上の価値を「幻想」（40行目）として与えてしまっている……という点であろう（Ⓐ）。

その上で「貨幣」につなげて述べていくなら、「自己増殖の運動をひき起こし、人と人の関係も生みだしている」（35行目）という部分に即していけばよい。つまり、「学力」はそれ自体が目的とされるようになり（元来は人の能力の一側面を測る道具であったモノが、逆に「学力を伸ばすために」という人の獲得目標になってしまったということ）、そこから人間関係が決まってくるようになった……ということだ。この点の指摘もあればいい（Ⓑ）。

以上Ⓐ・Ⓑ二点の述べられた解答ならば、出題者の要求を満たしたものとなろう。

【問題】（演習／一橋大対応問題）

出典…白鳥庫吉『歴史と人傑』（明治二十三年二月「史学会雑誌」第三号所載）／ 京都大学 後期・01年

文章略解

東洋の歴史は、帝王傑物の事績を書き連ねた記録である。西洋においても、前近代まではこの種のものが多かった。帝王が国民を支配し、その自由意志が絶対的な法令となるような兵制的社会の時代では、歴史の編纂に携わる者が帝王傑物の業績のみに関心を寄せるのは無理からぬことである。が、西洋の人はいち早く、時代の推移は、社会の諸現象の因果が複雑に入りくんだ、必然的連関によると考えた。傑物は、社会の変化していく方向を察知し、機に乗じてその傀儡になったにすぎない。したがって、歴史家の主題は、社会運動の原動力のほうであって、変化の原因や影響を司る法則を究明することが肝心である。

解答

問1 (ア) この世の中でどう生きたらよいかを示してくれる指針、ということ。〔31字〕

(イ) 民衆の実情や要望が為政者に届くことを可能にする術もなく、ということ。〔34字〕

問2 ・人間の感情には元々傑物を尊重し崇拝する傾向があり、またその言行業績が、思想や処世術を説く格好の手本となるから。〔55字〕

・支配者たる帝王に政治上の絶対的権力が集中する社会では、彼の自由意志が社会を動かす最有力の力となるため。〔51字〕

問3 社会には、一筋の必然的な時代の流れというものがあり、その強大な勢いを押し止めることは不可能だ、ということ。〔53字〕

問4 時代がどう動こうとしているかを察知し、機に乗じてその傀儡となったにすぎず、傑物を傑物たらしめた主体は、社会の側にある。〔59字〕

【問題】（自習／一橋大対応問題）

出典…幸田露伴『趣味』／一橋大学・99年

文章略解

趣味とは人の嗜好であり、見識であり、思想であり、気品であり、性情である。したがって自ら養い、培っていくことが望ましい。趣味は人ごとに千差万別であるから、他人を基準にすることはできず、自らの自然の気持ちに基づくのがよい。そして、自分の趣味が充分でないという自覚は、さらなる趣味の向上を産む上で大切である。欲望が人を苦しめるのに対し、趣味はその人を束縛することがなく、豊かに活かしていくものである。

解答

問1　人間の性格や気質のうち、優れた部分だけを残す必要があること。〔30字・解答例〕

問2　自分の趣味によって他人の判断はできず、他人の趣味に合わせて自分のあり方を変えるのも同様に困難である。〔50字・解答例〕

問3　自分の趣味の不足点を知ることが、趣味の充実につながること。〔29字・解答例〕

問4　エ

解説

問1　文語調の記述の意味を「わかりやすく説明」するとは、実際にはそれぞれを平易な口語に置き換えていく作業が軸になる。ここではまず「淘汰」という漢語と、「……せざるべからず」という二重否定表現の二つを置き換えることから考えよう。「淘汰」とは、「優れたもの・秀でたものが残り、そうでないものが滅びていく自然のなりゆき」というほどの意味である。ここでは、「性情」の

うちよい部分が残っていくようになる（する）ことを意味する。また、二重否定は「強い肯定」の意味あいを持つ。文語の助動詞「べし」は当然・推量・勧誘・適当など、様々な意味を持つが、ここでは、続く部分での「思想」「見識」「嗜好」等についての記述が「……要す」「……欲す」「……ありたし」（2行目）となっていることから、「適当」のニュアンスに解するのが妥当であろう。「適当」＋「強い肯定」であるから、ここの部分に当てるべき表現としては「……の必要がある」「……しないわけにはいかない」などが好適か。

ここまでの部分をまとめると、「性情のうちよい部分を残さないわけにはいかない。」（23字）という内容の解答になろう。まだ制限字数には余裕があるので、「性情」＝「人間の性質や心情・気質」という程度の言い換えをしておくとさらによい。

問2　傍線部分は、直前にあるように「人の趣味」（6行目）について述べた部分である。したがって、ここに言う「自れ」とは「自分の趣味」、対して「他」とは「他人の趣味」ということだ。これを踏まえて傍線部分の表現全体を置き換えていく。

「自れを以て他を律すべからず」とは、「自分の趣味によって他人の趣味を律してはならない」ということ。ここの「律す」を適当な語に置き換えるなら「判断する」「善し悪しを決める」ということになろう。つまり、自分の趣味を基準にして他人の趣味をどうこういってはいけない、ということだ。ここでの「べし」は命令（「べからず」は禁止の命令）に解釈しておくのが妥当。

これとの対応関係で「彼に従ひて之を枉げんも亦難し」を解釈していくと、「彼」は今度は「他人の趣味」、「之」は「こちら（自分）の趣味」となろう。自分の趣味を「枉げん」というのであるから、この「ん」は「意志」のニュアンスである。したがって、「他人の趣味に合わせて自分の趣味を枉げようとするのも同様に難しい」ということだ。

以上のそれぞれの表現の置き換えを忠実にしていくと、おおよそ制限字数は満ちてしまうはずだ。

問3　前問同様に、「足らざる」「満つる」の主語は「趣味」である。それの「不足」を知れば、「満足」に続く路なのだ……というのが傍線部分の主旨である。この表現は、続く「至らざるを悟るとは上に向かふの途なり」と対になっている。双方で「量的な不充分さ」「質的な不充分さ」の両面を述べていることにも注意を払いたい。

以上を踏まえて、傍線部分全体を言い換えればよい。

問4　傍線部に先立って、「趣味」と「欲望」の対比を述べている部分の記述を追っていく。筆者（幸田露伴）によれば、「趣味」とは「時に応じ所に従ひて、何の時にも那の所にも、怡悦の情を見出し得る」（21～22行目）ものであるのに対し、「欲望」とは「其の物を得ざれば苦しみ、其の願を遂げざれば悩み、吾が心を外の物の奴卑として、その使役するところとなる」（22～23行目）ものだとされている。要するに「趣味」が「いつでも・何でも」なのに対し、「欲望」は「其の物」「其の願」に使役されるもの……ということである。こうしたニュアンスを忠実に反映させている選択肢はエ。アは「はじめから限定されている…」が不適切。イは「能力を伸ばす」が言い過ぎ。ウは「しばりつけ苦しめるだけ」という限定がおかしい。欲望は「其の物」「其の願」に使役されるから人を苦しめるのである。「苦しめるだけ」なら欲望にはならない。

【問題】（演習／京大・難関国公立大対応問題）

出典…梅崎春生『庭の眺め』　／　千葉大学　文学部・法経学部・01年

文章略解

「私」の家の狭い庭にはさまざまな動物がやってくる。汲取屋の馬車馬が通過したこともあった。隣の古畑夫妻が私の庭の隅に勝手に張ったカスミ網をこの馬は食いちぎってしまったのだ。その後は知らないが、日頃なかなかずるい汲取屋のことだからきっと弁償していないだろう。古畑のお内儀さんは、「私」に執拗に汲取券を売ろうとしたり、カスミ網にかかった小鳥を売りに来たりもした。おそらくは「私」の反応が見たかったのだろう。

解答

問1　ア＝わいしょう　　イ＝あやつ　　ウ＝じゅず　　エ＝くぜつ（くどき）　　オ＝つがい

問2　①＝エ　　②＝ウ

問3　狭い庭に唐突に馬が現れたことによって、それまで見慣れていた風景のバランスが崩れた感じがしたから。〔48字・解答例〕

問4　馬の飼い主の汲取屋に対しても、カスミ網を無断で張った隣家に対しても、事件を知らせるほどの義理を「私」は感じていなかったから。〔62字・解答例〕

問5　突然の馬の出現によって、隣家のお内儀が周囲のものを崩すほど慌てたという関係。〔38字・解答例〕

問6　できるだけ多くの口説をすることで何とか「私」に汲み取り券を買わせようとすること。〔40字・解答例〕

問7　「私」の庭の隅に無断で仕掛けたカスミ網にかかった小鳥を売っていることに対して、「私」がどのように思っているかという反応。〔60字・解答例〕

【問題】（自習／京大・難関国公立大対応問題）

出典…安部公房『鞄』　／　横浜市立大学　国際文化学部・00年

文章略解

求人広告を出して半年後に、「私」の事務所に一人の青年が応募してきた。事情を聞くと、大きな鞄を持ち歩く都合上、急坂や階段のある道を避けた結果としてここに来たという。奇妙な話だったが、人手不足だったこともあって「私」は採用を決め、彼に下宿を斡旋した。彼が出かけた間にその鞄を持ってみた「私」は、その鞄の重さが、ちゃんと「私」を導いてくれる……という妙な安心を感じていた。選ぶ道がなければ、迷うこともないのだ。

解答

問1　遅すぎる応募に、案の定「私」も呆れて応対したから。〔25字〕

問2　職探しに大きな鞄を持ち歩く必要性ゆえ、途中に急坂や階段のある求人先を一つずつ候補から外していくこと。〔50字〕

問3　青年が単に鞄の事情だけで応募してきたと知ったから。〔25字〕

問4　青年の求職活動先が「私」の事務所以外になる可能性。〔25字〕

問5　勤め先と下宿の間に急坂や階段があるか否か。〔21字〕

問6　問題文における「鞄」は、一見行動の自由を制約するようだが、裏を返せば進む方向を決める契機になるものとして描かれている。このように、過剰な自由があると逆に己の進む方向を見失うこともあることが読みとれる。〔100字〕

解説

問1　こういった心情に関する理由説明問題では、その心情に至る経緯を説明することがすなわち理由を説明したことになる。そして、その際念頭に置いておきたいのが、「事件・出来事→心情→行動」という図式である。人間は、ある「できごと」に対して何らかの「心情」を抱き、そしてその「心情」に基づいて「行動」を起す。このサイクルが一々書かれることは少ないが、原理的には極めて有効である。古文であれ漢文であれ、心情や行動の理由が求められた場合には、基本的にこの図式に当てはめて考えていくとよい。

さて、この設問だが、青年に「やはり、駄目でしたか」という感想を抱かせた「できごと」を指摘してやればよい。この場合の「できごと」に相当するのは、直前「呆れてものも言えないでいる私」である。したがって、この点を指摘するのが大切。

しかし、ここはもう一つ指摘が必要。なぜなら、傍線部に「やはり」とあるからだ。青年が「やはり」と発言している以上、青年もうすうす駄目じゃないかと思っていたことになる。それゆえ、青年側の理由が必要。それは、「遅すぎる応募」であったという点。

よって、この設問では右の二点を答案に含めなければならない。

問2　この設問で求められているのが

・「一種の消去法」の内容説明

・「一種の消去法」が必要になった理由説明

の二点であることを明確に意識するところから始めよう（しかも、「具体的に」という指示がついている）。諸君の中には、しばしば設問の指示をいい加減に読み飛ばしてしまう人がいるが、それでは高得点は望めない。設問で要求されていることはしっかり把握すること。特に記述式の場合、ここを読み誤ると無駄に時間を費やすことにしかならない。

さてこの場合だが、「一種の消去法」の内容は、18行目〜22行目にある青年の発言が大きなヒントとなる。「具体的に」とあるので、この発言に即してまとめると、

・急な坂や階段が行く先にある求人先は候補から外していく

くらいになろう。また、理由説明に関しても、25行目の発言がヒントになる。この青年にとっては、「鞄を手放すなんて…あり得

ない仮説」だというのだから、

・鞄を常に携帯するため

というのが、理由ということである。

以上の二点を含んだ答案であれば、可である。

問3　**問1**と同様の解き方をする。「私」が「気勢をそがれ」るに至った経緯を説明してやればよい。具体的には、「できごと」を指摘するのがここでの作業課題ということになる。

この場合の「できごと」は直前の青年の発言にある。つまり、

・青年の応募動機が「鞄」であった

という点の指摘が是非とも必要である。しかし、これだけを書いても「私」が「気勢をそがれ」たことの理由として十分とは言い難い。**問1**の場合にも青年側の理由があったように、この場合も「私」の側の理由が必要である。

「気勢をそがれ」たという以上、「私」の側にはある種の「気持ちの高ぶり」があったはずである。それは、「思わせぶりになりかねない口上」（15行目）というあたりからもうかがえる。それゆえ、この期待との落差についても触れておきたい。解答例では「単に」という表現がそれに当たる。二十五字という字数制限ではこの点への言及を十分にすることはできないが、諸君なりの工夫はほしいところである。

問4　読解力というよりは表現力が試されている設問。青年と「私」の対話に注目すれば、ここで「私」が論じている「可能性」が34～35行目を指すものであることは明らかであろう。とすれば、この部分が何の可能性について言及しているのかを指摘すればよい。そして、青年が「そんなにぼくを雇いたくないんですか」（36行目）と対応していることからすれば、これは青年を雇わない可能性ということになろう。あとは、これをどう表現するかである。

注意したいのはただ一点。「鞄の重さに変化がおきて、ぜんぜん歩けなくなる」とも言ってはいるが「宅地造成で新しい道を選べるようになる」という点も勘案すれば、ここで「私」が言っているのは、青年が「私」の事務所に来られなくなる可能性ではなく、「私」の事務所以外にも行ける可能性と把握すべきである。それゆえ、「青年が私の事務所に来られなくなる可能性」と限定し

てしまわないこと。むしろ、青年の選択肢が広がるという方向でまとめるべきであろう。

問5　出題者の狙いが少しつかみにくいが、「下宿と勤め先の間なんて、道のうちには入りませんよ」（62行目）と言っていることから考える。青年にとって大切なのは「下宿」そのものではなく、下宿と勤め先との間の「道」なのである。

問6　問題文中の「鞄」は、37～38行目の「私」の発言を参考にすれば、「不自由なもの・行動を拘束するもの」ということになりそうだが、しかし66行目以降特に最後の「私は嫌になるほど自由だった」という点を勘案すると、かえって「自由をもたらすもの」と捉えられそうである。したがって、この「鞄」の二面性を的確に押さえることが肝心である。つまり、「選ぶことに迷わないだけ自由なのだ」という点を問題文から読み取るべきなのである。これは裏を返すと、「選択の自由という不自由さ」ということでもある。

よって、一見行動の自由を束縛するかに見える「鞄」だが、実は選ぶことに迷わなくて良い分だけ心は伸び伸びと解放されることになる…という方向でまとめるとよいだろう。ポイントは、「自由」に関する逆説を正しく指摘することである。